

『教行信証』の研究 ―「証卷」を中心として―

小池 秀章

はじめに

『教行信証』は、正式には、『顯淨土真実教行証文類』と言い、「教卷」「行卷」「信卷」「証卷」「真仏土卷」「化身土卷」の六卷で成り立っている。その中の一つである「証卷」は、正式には「顯淨土真実証文類」と言う。この題号は、「淨土に往生することを目指す教えの中で、真実の証（さと）り」について顯した文章を集めたもの」という意味である。又、他の卷との関係から言えば、真実の行信によって与えられる真実の証果について説かれた卷であると言える。「証」という文字は、「無上菩提の因を証す」（「行卷」）（『註釈版聖典』一四二頁）の「証」に、「驗なり」と註釈されているように、もともとは「あかし・しるし」と言う意味である。因が因であることが明らかにするのは、因が果になった時である。種から必ずしも芽が出るとは限らない。種のまま枯れることもある。種は種のままでは因ではなく、種が芽という果になった時、初めて種が因だと言えるのである。よって、果は因の証（あかし）である。阿弥陀如来から回向された行信が、衆生を往生成仏させる因であるということは、衆生が往生成仏することによつ

て、「あかし」されるので、往生成仏の果を証と言ひ、内容的には、「さとり」を意味することになるのである。

「証卷」を理解する上で重要なテーマとしては、必至滅度（現生正定聚）・往生即成仏（難思議往生）・還相回向などが挙げられるが、先ずは、「証卷」の構成を分析し、文章を正確に理解することから始めたい。そして、「証卷」に説かれた世界を明らかにしていきたいと思う。

I. 「証卷」の構成

まず、「証卷」の構成は次のようになっている。

標挙（必至滅度の願 難思議往生）

題号（顕浄土真実証文類 四）・撰号（愚禿釈親鸞集）

本文

1. 往相の証果

（1）真実の証を顯す

（2）引文（經典の文・釈『論註』『安樂集』『觀經疏』の文）

（3）四法結釈

2. 還相の悲用

（1）還相回向を顯す

（2）引文（『浄土論』・『論註』の文）

3. 往還結釈

「証卷」の本文は、大きく二つに分かれている。前半は、往相の証果、つまり、浄土に往生して成仏するという事について明かし、後半は、還相の悲用、つまり、穢土に還つて来て衆生を救済することについて明かしている。この往相の証果と還相の悲用は、二つの事柄ではなく、往相の証果の内容が還相の悲用なのであり、浄土に往生して成仏するという事は、穢土に還つて来て衆生を救済するはたらきをする身となるということなのである。

そして、何よりも忘れてはならないことは、浄土に往生成仏することも、穢土に還つて来て衆生救済することも、ともに阿弥陀如来の本願力によるということである。そして、これを回向という言葉で顯し、往相回向・還相回向と言うのである。

Ⅱ. 標拳について

標拳として、「必至滅度の願 難思議往生」とある。

まず、願名についてみると、本文では、「必至滅度の願」「証大涅槃の願」の二つが、『浄土文類聚鈔』では、「必至滅度の願」の他に、「往相証果の願」「無上涅槃の願」の二つが挙げられている。これらは皆、第十一願のことである。「必至滅度の願」（必ず滅度に至らしめると誓われた願）の滅度とは、涅槃（ニルヴァーナ…煩惱の火が吹き消された静かな状態）の意訳語であり、煩惱の消滅と、彼岸に渡ることを合わせて滅度と言う。小乗仏教の涅槃は、

自利中心の静的な涅槃であり、譬えればコマが止まっているような静けさである。それに対して、大乘仏教の涅槃は、自利利他円満の動的な涅槃であり、譬えればコマが猛烈に回っているような静けさである。「証卷」における涅槃とは、当然、小乗仏教の涅槃ではなく大乘仏教の涅槃、つまり自利利他円満の最高の涅槃（大涅槃・無上涅槃）である。よって、「証大涅槃の願」「無上涅槃の願」と言うのである。また、それが、自力の修行によって獲得した悟りではなく、阿弥陀如来の本願力回向によって、浄土に往生（往相）して獲得した証果であるので、「往相証果の願」と言うのである。

ちなみに、「必至滅度の願」は魏訳の『大経』の第十一願文（「必至滅度者 不取正覚」）から、「証大涅槃の願」は唐訳『如来会』の第十一願文（「証大涅槃者 不取菩提」）から取った名（文名）であり、「往相証果の願」と「無上涅槃の願」は、法義から立てられて名（義名）である。

第十一願には、「たとひわれ仏を得たらんに、国のうちの人・天、定聚に住し、かならず滅度に至らずは、正覚を取らじ」と誓われているが、普通に読めば、浄土に生まれた者を、正定聚（必ず仏に成ることが決定しているな^{（前）}かま）という位につけしめ、必ず仏に成らしめると誓われているとしか理解できない。しかし親鸞は、正定聚に住することを、信心の利益・現生の利益としている。このことは、「信巻」「現生十益」の十番目に、「入正定聚の益」（『註釈版聖典』二五一頁）が説かれていることから明らかである。つまり、親鸞は、第十一願には、現生の利益としての正定聚（不退転）と、当来の利益としての滅度（成仏）の、現当二益が誓われていると捉えているのである。

第十一願が、現生の利益として、信心を得た時、正定聚に住することが誓われている願であると捉えていることは、『如来二種回向文』に、

「この必至滅度の大願をおこしたまひて、この眞実信樂をえたらん人は、すなはち正定聚の位に住せしめんと誓ひ

たまへり。」〔註釈版聖典〕七二二頁)

とあり、『一念多念証文』に

「かくのごとく法蔵菩薩誓ひたまへるを、釈迦如来、五濁のわれらがために説きたまへる文のこころは、「それ衆生あつて、かの国に生まれんとするもの(生まれようとするもの)は、みなことごとく正定聚に住す。ゆゑはいかんとなれば、かの仏国のうちには、もろもろの邪聚および不定聚はなければなり」とのたまへり。」〔註釈版聖典〕六七九～六八〇頁)

とあることよりわかる。

また、第十一願が、当来の利益として、大涅槃(成仏)を得ることを誓つた願であると捉えていることは、『尊号真像銘文』に、

「〔証大涅槃〕と申すは、必至滅度の願(第十一願)成就のゆゑにかならず大般涅槃をさとりとしるべし。〔滅度〕と申すは大涅槃なり。」〔註釈版聖典〕六七二頁)とあることよりわかる。

以上、親鸞は、第十一願には、現生において正定聚に住することと、浄土に往生して涅槃を得るといふ二つのことが誓われているとしたが、「必至滅度の願」と標拳にあるように、「証卷」においては、浄土に往生して涅槃を得るということが中心である。なぜなら、現生において正定聚に住するということは、厳密に言うとは、証ではなく利益であるからである。真実の証とは、浄土往生後(当来)に涅槃のさとりを得ることである。ちなみに、現生の利益としての正定聚については、「信卷」(現生十益)において明らかにされている。^(註文)

次に、「必至滅度の願」に対応して、「難思議往生」と標拳されているが、この難思議往生の語は、善導の『法事

讚」の「難思議往生樂、双樹林下往生樂 難思往生樂」(『註釈版聖典七祖篇』五一四頁)によったものだと思われる。善導においては、この三種の往生樂は同一の内容を表すものであったが、親鸞はそれを転用し、別の意味で使っている。『愚禿鈔』に、

「一には、難思議往生は、『大經』の宗なり。」

二には、双樹林下往生は、『觀經』の宗なり。」

三には、難思往生は、『弥陀經』の宗なり。」(『註釈版聖典』五〇五頁)

とあり、『三經往生文類』には、

「大經往生といふは、如來選拔の本願、不可思議の願海、これを他力と申すなり。これすなはち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚の位に住して、かならず眞實報土に至る。これは阿彌陀如來の往相回向の眞因なるがゆゑに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大經』の宗致とす。このゆゑに大經往生と申す、また難思議往生と申すなり。」(『註釈版聖典』六二五頁)

「觀經往生といふは、修諸功德の願(第十九願)により、至心發願のちかひにいたりて、万善諸行の自善を回向して、淨土を欣慕せしむるなり。」(『註釈版聖典』六三〇〜六三一頁)

「弥陀經往生といふは、植諸徳本の誓願(第二十願)によりて不果遂者の眞門にいたり、善本徳本の名号を選びて万善諸行の少善をさしおく。しかりといへども定散自力の行人は、不可思議の仏智を疑惑して信受せず。如來の尊号をおのれが善根として、みづから淨土に回向して果遂のちかひをたのむ。不可思議の名号を称念しながら、不可稱不可説不可思議の大悲の誓願を疑ふ。」(『註釈版聖典』六三五頁)

とある。これらによると、『大經』に説かれる他力念仏による往生のことを難思議往生と言い、『觀經』に説かれる

諸行による往生のことを双樹林下往生と言い、『小経』に説かれる自力念仏による往生のことを難思往生と言うのである。

難思議往生についてももう少し詳しく言えば、不可思議なる阿弥陀如来の本願他力によって回向された行信を因として、現生では正定聚に住し、当来には必ず真実報土に往生して、無上涅槃のさとりという果を得る。このような往生を大経往生または難思議往生と言うのである。

Ⅲ、本文の概要

1. 往相の証果

(1) 真実の証を顕す

つつしんで真実の証を顕さば、すなはちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり。すなはちこれ必至滅度の願(第十一願)より出でたり。また証大涅槃の願と名づくるなり。しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。かならず滅度に至るはすなはちこれ常樂なり。常樂はすなはちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなはちこれ無為法身なり。無為法身はすなはちこれ実相なり。実相はすなはちこれ法性なり。法性はすなはちこれ真如なり。真如はすなはちこれ一如なり。しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種々の身を現したまふなり。

「証卷」本文の最初に、

「つつしんで真実の証を顕さば、すなはちこれ他力円満の妙位、無上涅槃の極果なり。」

とある。「他力円満の妙位」の利他とは、阿弥陀如来の他力、すなわち他力のことである。「証卷」の最後に、

「宗師(曇鸞)は大悲往還の回向を顯示して、ねんごろに他利利他の深義を弘宣したまへり。」(『註釈版聖典』三三五頁)とあり、他利利他の深義とは、「行卷」「他力釈」の『論註』の引文に、

「他利と利他と、談ずるに左右あり。もし仏よりしていれば、よろしく利他といふべし。衆生よりしていれば、よろしく他利といふべし。いままさに仏力を談ぜんとす、このゆゑに利他をもつてこれをいふ。」(『註釈版聖典』一九二頁)

とあるものである。これによると、利他とは、仏から言つた言葉であり、「仏が他(衆生)を利する」、つまり、如来の本願力(他力)のこととなる。

よつて、「他力円満の妙位」とは、阿弥陀如来の本願力によつて与えられた功德の欠けのない優れた仏の位のこと、「無上涅槃の極果」とは、最高の涅槃である究極の仏果のことである。それは、自利利他円満の涅槃、すなわち、「智慧あるが故に生死に住せず 慈悲あるが故に涅槃に住せず」と言われる無住処涅槃のことである。

以上を確定した上で、「他力円満の妙意」の利他について一言付け加えると、他力のことでありながら、その内実として、往生人が穢土に還つて来て他(衆生)を利する、という自利に対する「利他」の意味も含まれると言つてもよいのではないだろうか。それは、他力によつて与えられた最も優れた境地が、自利利他円満の涅槃(無上涅槃)であるということと、それを明かす還相回向の釈が「証卷」の多くを占めるということから窺える。^(註3)

つまり、親鸞は、真実の証とは、自力で完成する悟りではなく、阿弥陀如来より回向された最高の悟りであり、

それは、自利利他円満の境地であることを顕されたのである。そして次の

「すなはちこれ必至滅度の願（第十一願）より出でたり。また証大涅槃の願と名づくるなり。」

の文も、真実の証とは、自力で完成する悟りではなく、如来より回向された最高の仏果であり、具体的には、第十一願によることを顕するのである。続いて、

「しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乗正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。」

と、煩惱成就の凡夫が、如来回向の信心と念仏によって、即座に大乗正定聚の数に入り、必ず滅度に至ることを明かす。大乗正定聚とは、必ず仏果を得る仲間ということであるが、その仏果とは、仏に成つて終わりではなく、利他のはたらきをする大乗の涅槃である。さらに、

「かならず滅度に至るはすなはちこれ常樂なり。常樂はすなはちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなはちこれ無為法身なり。無為法身はすなはちこれ実相なり。実相はすなはちこれ法性なり。法性はすなはちこれ真如なり。真如はすなはちこれ一如なり。」

と、その境地を、滅度・常樂・畢竟寂滅・無上涅槃・無為法身・実相・法性・真如・一如といった言葉で表現し、「しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種々の身を示し現じたまふなり」と、阿弥陀如来の一如よりの示現を述べている。

この文章は、一見唐突に見える。「しかれば」という接続詞は、「そうであるなら」という意味で、「証とは、真如とか一如であらわせるならば」という意味となる。つまり、浄土に往生するということは、阿弥陀如来がそこから顕現してくるような一如（真如）に到達することであるということを表しているのである。このことから、次の

四つが明らかとなる。

①往生即成仏

従来の理解では、往生とは、浄土という修行するのに環境のよい場所に往き生まれることであって、浄土に往生した後、修行して成仏するのである。しかし、親鸞は、浄土を修行の場ではなく、弥陀がそこから顕現してくるような一如のさとりそのものであると捉えている。往生とは、そのような一如に到達することであるので、即座にさとり境地に入ることになる。ここに往生即成仏が明らかとなる。^(註4)

②弥陀同体のさとり^(註5)

往生人の証が、弥陀がそこから顕現してくるような一如のさとりであるということは、弥陀同体のさとりをめぐまれるということである。

③還相のはたらきが含まれる

往生人の証が、弥陀同体のさとりであるならば、当然、往生人も弥陀と同じく如より来生し、還相摂化のはたらきをするということになる。

④弥陀の回向による証

弥陀が如より来生し、種々の身を示して下さるということは、先述のような証を得るのは、弥陀のはたらきによるということを表すものでもある。

以上、『教行信証』では、結論を最初に述べられていることが多いが、ここでも、最初の御自釈で、真実の証とは何かということを明確に示している。そして、その内容を証明するために、以下の経・論・釈の引文があるのである。また、前半で述べられている証の内容は、必然的に、後半の還相回向の釈へと展開するのである。

(2) 引文（經典の文・釈（論註）『安樂集』『觀經疏』）の文

続いて經の引文である。『大經』第十一願文(①)・『如來會』第十一願文(②)・『大經』第十一願成就文(③)・『大經』眷屬莊嚴の文(④)・『如來會』第十一願成就文(⑤)の五文である。

『大經』第十一願文(①)・『如來會』第十一願文(②)・『大經』第十一願成就文(③)は、ともに、「國中の人天」「國中の有情」「かの國に生るれば」と、淨土に往生した者が正定聚に住すと示されている。しかし、親鸞は、『如來會』成就文(⑤)の「もしまさに生まれん者」に注目し、現生で正定聚に住すと受け取った。またそれは、『一念多念証文』に『大經』第十一願成就文(③)を取り上げ、「かの國に生まれんとするもの(生まれようとするもの)は」(『註釈版聖典』六八〇頁)と解釈されていることから明らかことは、すでに第十一願の考察のところ述べた通りである。よって、經の引用意図は、当來の必至滅度(必ず滅度に至る)が、本願力(具體的には第十一願)よることを顯かにする為である。

尚、經文の中に、淨土に声聞・菩薩・天・人等が存在するとあるのは、『大經』眷屬莊嚴の文(④)に、「ただ、余方に因順するがゆゑに、人・天の名あり」(『註釈版聖典』三〇八頁)とあるように、これらは、他の世界にならなくてももとの名前で書かれているだけであり、その実は、その内徳において、すでに無上涅槃を証しているものである。このように、内に仏のさとりを開いていながら、外に菩薩等の姿をあらわしていることを、広門「示現の相」と言う。故に、「ことごとく同じく」類にして、形異状なし。」とか「みな自然虚無の身、無極の体を受けたるなり」(『註釈版聖典』三〇八頁)と言えるのである。

次は、釈の引文である。曇鸞『論註』(①②③)・道綽『安樂集』(④)・善導『觀經疏』(⑤⑥)の六文である。

先ず、曇鸞『論註』(①)は、国土莊嚴の第十一「妙声功德」(A)、第十二「主功德」(B)、第十三「眷属功德」(C)の三文を連引している。

「妙声功德」の文(A)は、名号のはたらき(国土の名字)によって、現生で正定聚に入ること、明かすものである。通常は「剋念して生ぜんと願すれば、また往生を得て、すなはち正定聚に入る」と読み、往生後の入正定聚を語るところを、親鸞は「剋念して生ぜんと願せんものと、また往生を得るものとは、すなはち正定聚に入る」と読み、「剋念して生ぜんと願ぜん者(此土)」と「往生を得る者(彼土)」との二種類の正定聚があることを示している。『一念多念証文』には、

「この文のころは、「もしひと、ひとへにかの国の清淨安樂なるを聞きて、剋念して生れんと願ふひとと、またすでに往生を得たるひとと、すなはち正定聚に入るなり。これはこれ、かの国の名字を聞くにさだめて仏事をなす。いづくんぞ思議すべきや」とのたまへるなり。安樂淨土の不可称不可説不可思議の徳をもとめず、しらざるに、信ずる人に得しむとするべしとなり。」(『註釈版聖典』六八一頁)

とある。親鸞は、信一念に現生で正定聚に入ると捉えるのを基本とするが、彼土の正定聚を語ることもある。この場合は、正定即滅度であり、従果降因の相を示すものである。これを、広門示現の相と呼んでいる。

「主功德」の文(B)は、淨土は、阿弥陀如来によって善く住持されている世界であるので、そこに往生したものは、還相摂化が可能なことを示されている。ひとたび淨土に往生したならば、迷いの世界に戻って衆生を教化したいと願い、迷いの世界の火の中に生まれても、この上ないさとり種の種は決して朽ちることはない、不朽業の譬えをもつて、顯されている。

「眷属功德」の文(C)は、念仏者は、念仏という共通の因によって、正覺淨華より化生(淨土に往生)すると

いう共通の果を得ることを明かすものである。また、念仏するものは、共通の親を持つ、すなわち弥陀の眷属であるということから、「四海のうちみな兄弟とするなり。」と示されている。

『論註』『大義門功德』の文(②)は、娑婆世界では、衆生に差別はあるが、浄土に往生すれば、全く同一の仏果を得ることを明かすものである。先程の「眷属功德」の文とあわせれば、同一に念仏して浄土に往生するものは、同一の仏果を得ることを明かすものであると受け取れる。親鸞がするように考えていたことは、『入出二門偈』に、「如来浄華のもろもろの聖衆は、法蔵正覚の華より化生す。諸機は本すなはち三三の品なれども、いまは一二の殊異なし。同一に念仏して別の道なければなり、なほ溜滯の一味なるがごとくなり。」(『註釈版聖典』五四五―五四六頁)と、「眷属功德」の引文と「大義門功德」の引文をあわせたような文があることから明らかである。

『論註』『清浄功德』の文(③)は、煩惱成就の凡夫が、往相回向の心行によって、煩惱具足のままで浄土に往生し、涅槃の仏果を得るということ明かすものである。これを「煩惱を断ぜずして涅槃分を得」という言葉で示している。涅槃分の分とは、分満の分で涅槃の一分を意味する場合と、分斉(区別する)の義で、迷いの境界と区別されたさとの境界、つまり、涅槃のさとり全分を意味する場合の二義があるが、今は、後者の意味である。

道綽『安樂集』の文(④)では、前半で、釈迦が己の能力を述べず、弥陀のすぐれていることを述べているのは、衆生を弥陀に帰せしめる為であるということを示している。そして、後半で曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』を引用し、浄土に声聞・菩薩・人・天など、他方に順じてその名を列ねるが、みな虚無の身・無極の体であり、全く同一の証を開き、仏果を得るものであることを明かしている。

善導『観経疏』『玄義分』の文(⑤)は、

「一切善惡の凡夫、生ずることを得るは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁とせざることなしとなり。」(『註

と、一切善惡の凡夫が、浄土に往生するのは、阿弥陀如来の願力によるものであることを示すものである。一切の凡夫が浄土に往生するのは、弘願、すなわち第十八願によつてであるが、「法性の常樂を証すべし。」と、ここでは、必至滅度の願意を顯したものであると言えよう。

『觀經疏』『定善義』の文⑥は、眞実の証果の内容を顯すものである。

「西方寂滅無爲の樂には、畢竟逍遙して有無を離れたり。」（『註釈版聖典』三二二頁）

と、煩惱を滅した何ものにもとらわれないさとりの世界を示し、

「大悲、心に薰じて法界に遊ぶ。分身して物を利すること、等しくして殊なることなし。」

と、さとりを開くということは、衆生救済のはたらきをすることであることを明かす。そして、

「歸去來、魔郷には停まるべからず。（中略）かの涅槃の城に入らん」

と、この魔郷を捨てて、浄土に往生すべきことを勧めている。

（3）四法結釈

そして、「四法結釈」と呼ばれる御自釈が続く。

「それ眞宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、浄なるがゆゑに果また浄なり。知るべしとなり。」

これは、真実証の結文であると同時に、『教行信証』の四法全体（往相回向全体）の結文でもある。「教卷」の冒頭に、「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。」（『註釈版聖典』一三五頁）

とあるものを受けたものである。つまり、真実の教行信証のすべてが、阿弥陀如来の回向であることを示し、結びとされるのである。

以上で、往相回向について述べ終わったわけであるが、真実の証の内容として、次の還相回向が語られるのである。真実の証とは、浄土に往生して仏と成って終わりではなく、この世に還って来て、衆生救済のはたらきをする身に成るということなのである。この往相も還相も、阿弥陀如来の本願力のなさしめるところであり、往相回向は還相回向へと必然的に展開するということを、『正像末和讃』では、

「南無阿弥陀仏の回向の 恩徳広大不思議にて

往相回向の利益には 還相回向に回入せり」（『註釈版聖典』六〇九頁）

と述べられている。

大乘仏教における真の目的は、一切衆生の救済である。自分が仏に成るということは、一切衆生を救済することのできる身となることなのである。親鸞にとつて、浄土に往生することは成仏の為であり、それは同時に衆生救済の為であった。故に、浄土真宗を大乘至極の仏教と言うのである。

尚、往相回向・還相回向という言葉の使い方についてであるが、曇鸞の場合、往相回向とは、五念門中の回向門、すなわち、自らの修行によつて体得した功德を、一切の衆生に回向して、自他共に浄土に往生しようとするのである。そして、還相回向とは、五功德門中の園林遊戯地門のことで、浄土に往生した後、一切の衆生を救済すると

いうことである。いずれにせよ、回向の主体は、浄土願生者である。それに対して親鸞は、回向の主体を、浄土願生者から弥陀へ転換したのである。すなわち、衆生の往相も還相も、弥陀の本願力回向によることを明らかにされるのである。

2. 還相の悲用

(1) 還相回向を顯す

続く御自釈以下で、還相回向について顯らかにしている。まず御自釈に、

「二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補処の願（第二十二願）より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。『註論』（論註）に顯れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。」（『註釈版聖典』三二三頁）とある。

往相とは、「往生浄土の相状」の意味であるのに対し、還相とは、「還来穢国の相状」の意味である。つまり、還相とは「浄土に往生した後、（衆生救済の為に）この世（穢国）に還ってくるありさま」という意味である。そして、それが、阿弥陀仏の本願力によるということを回向という言葉で表している。

「利他教化地の益」の「利他」とは、自利に対する利益他（他を利益する）の意味であり、「教化地」とは、衆生摂化の地位のことである。つまり、浄土に往生し成仏した者は、穢土に還って来て衆生を救済するというはたらしきをするということである。但し、還相を可能ならしめるのは、阿弥陀仏の本願力であることを考えれば、「利他」

の根源に、他力の意が含まれていると言ってもよいであろう。^(註6)

還相が阿弥陀仏の本願力回向によることを明確に示したものが、次の

「すなはちこれ必至補処の願（二十二願）より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。」

という言葉である。「必至補処の願」と「一生補処の願」という願名は、魏訳の『大経』の第二十二願文（「究竟必至 一生補処」）から取った名（文名）であり、「還相回向の願」という願名は、法義から立てられた名（義名）である。

第二十二願文は、次に直接引用せず、

「『註論』（論註）に顯れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。」
と、後の『論註』の引文の中での引用となっている。

第二十二願文の原文を漢文で挙げると、

「設我得仏 他方仏土 諸菩薩衆 來生我國 究竟必至 一生補処 除其本願 自在所化 為衆生故 被弘誓鎧 積累德本 度脱一切 遊諸仏國 修菩薩行 供養十方 諸仏如來 開化恒砂 無量衆生 使立無上正真之道 超出常倫 諸地之行 現前修習 普賢之德 若不爾者 不取正覺」（『原典版聖典』二三頁）

であるが、曇鸞や親鸞の読み方は通常とは違う。まず、それを挙げれば、次のようになる。^(註7)

①通常の読み方（一生補処に至らしめることを誓った願）

へたとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが國に來生せば、究竟してかならず一生補処に至らしめん。その本願ありて、自在に化せんとする所の衆生の為のゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度

脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめ、常倫に超出して諸地の行現前し、普賢の徳を修習せんものを除く。若ししからずは正覚を取らじ」

②曇鸞の読み方（常倫を超えて一生補処に至らしめることを誓った願）

「たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生せば、究竟してかならず一生補処に至らん。その本願ありて、自在に所化の衆生の為のゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん。若ししからずは正覚を取らじ」

③親鸞の読み方（還相回向を誓った願）

「たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生して究竟してかならず一生補処に至らん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱せしめ、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは正覚を取らじ」（『註釈版聖典』三二六頁）

通常の読みに従えば、「他方仏土のもろもろの菩薩たちが、浄土に生まれて來たら、最終的には、必ず一生補処の位に至らせよう。」ということと誓った願である。「除其本願」以下は、その除外例を示すものとなっている。つまり、その菩薩が浄土に生まれる前に持っていた、利他のはたらきをしたいという願い（ここではこれを本願と言う）に従って活動する場合は除くと言うのである。ちなみに、一生補処の位についた菩薩が成仏するのは何処かと言えば、他方の仏土に還ってからであると受け取るべきであろう。

そして、「常倫に超出して諸地の行現前し、普賢の徳を修習せんものを除く。」の部分は、除外例とされた菩薩が、

衆生を教化する上で、菩薩の通常の階位を超えて、普賢菩薩のような至極の救済活動をなすことを表している。

以上、通常の読みに従えば、第二十二願は、「浄土に往生した者の一生補処を誓った願」であり、穢土に還って衆生を救済するということは、他方仏土の菩薩（願生者）が起こしていた願いであって、阿弥陀仏が還相回向を誓われた願とは言えないのである。

次に曇鸞は、「常倫を超えて一生補処に至らしめることを誓った願」であるとされている。「常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん。」の部分で、除外例として示した菩薩に関する内容ではなく、一生補処の位に至らしめる菩薩に関する内容であるとするのである。つまり、浄土に往生した者が、つきなみ（常倫）に一地から二地、二地から三地と位が上がっていくのではなく、速やかに一生補処の位に至らしめられ、普賢菩薩のような至極の救済活動をなすのである。そして、この「速やか」の根拠が、弥陀の本願にあるとするのである。このことは、『論註』の三願的証のところで第二十二願を引用し、

「仏願力によるがゆゑに、常倫諸地の行を超出し、現前に普賢の徳を修習せん。常倫諸地の行を超出するをもつてのゆゑに、ゆゑに速やかなることを得る三の証なり。」（『註釈版聖典七祖篇』一五七頁）

とあることからわかる。ちなみに、曇鸞の言う一生補処とは、当然、衆生が仏に向かうという従因至果の一生補処である。

以上、曇鸞において、第二十二願は、「常倫を超えて一生補処に至らしめることを誓った願」であり、穢土に還って衆生を救済するということは、従因至果の一生補処の菩薩のはたらきであって、親鸞の理解と異なると言わねばならない。

親鸞は、この第二十二願を「還相回向の願」と呼んでいる。第二十二願は、三段に分けられるが、一段目「一生

補処に至らしめる」と誓われた部分は、往相、すなわち從因至果の菩薩ではなく、還相、すなわち從果降因の菩薩であると受け取らなくてはならない。浄土に往生した者が、成仏した後、從果降因して一生補処の菩薩となることを誓っているのである。これは、還相の菩薩の浄土における位相（本国位相）を示したものである。

二段目「除其本願」以下の除外例は、從果降因した還相の菩薩が衆生を救済（他方摂化）するすがたを顕したものである。ここの「その本願」とは、阿弥陀仏の本願（第二十二願）を指しており、本願のはたらきによって、衆生救済が可能ならしめると示されているのである。

三段目「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。」等の文は、「本国位相」も「他方摂化」も、從果降因の示現の相であるので、常並の菩薩の階位を超えて機縁に應じて自在に姿を変えて、教化がなされることを示すものである。

『浄土和讃』には、

「安樂無量の大菩薩 一生補処にいたるなり

普賢の徳に帰してこそ 穢国にかならず化するなれ」（『親鸞聖人真蹟集成 三』三三頁）

とあり、「普賢の徳」の左訓に、

「われら衆生、極樂にまゐりなば、大慈大悲をおこして、十方に至りて衆生を利益するなり。仏の至極の慈悲を普賢とまうすなり」

とある。これらによると、浄土に往生したものは、一生補処の位に至り、普賢の徳に従って、衆生を救済するのであるが、この普賢の徳こそ、仏の至極の慈悲だというのである。つまり、親鸞において還相とは、仏になったものが行う至極の慈悲の活動なのである。

以上、親鸞における還相の活動は、浄土に往生した者が成仏した後、従果降因して菩薩の位においてこれをなすのである。そして、それを可能ならしめているのが、本願のはたらきであるとするのである。

御自釈に続いて、釈の引文であるが、『浄土論』一文、『論註』十一文が引用されている。すべて還相回向を明かす引文であるが、その考察は、別の機会に譲りたいと思う。

3. 往還結釈

最後に、

「しかれば大聖（釈尊）の真言、まことに知んぬ、大涅槃を証することは願力の回向によりてなり。還相の利益は利他の正意を顕すなり。（以下省略）」（『註釈版聖典』三三五頁）

と、「証卷」を結んでいる。この文章は、「証卷」の結論であり、往相回向と還相回向を総括されたものである。大涅槃を証することが本願力の回向によるということは、同時に還相のはたらきも本願力の回向によることを表す。なぜなら、大涅槃（大乘の涅槃）は、自利のみで完成するものではなく、利他によって完成するものであり、往相は必然的に還相へと展開するからである。

また、「利他の正意」の「利他」とは、阿弥陀仏の利他（本願力）であると同時に、往生者の利他である。つまり、穢土に還って衆生を救済するという事が、阿弥陀仏の本意であると同時に、阿弥陀仏に救われた往生者の本意でもあるのである。

おわりに

親鸞は、阿弥陀仏より回向された真実の行信によって、現生では、正定聚の位（現生正定聚）につき、当来には、浄土に往生すると同時に、必ず滅度に至る（往生即成仏・必至滅度）ということを明らかにされた。その滅度とは、無上涅槃・大涅槃のことであって、自らのさとりで完成で終わるのではなく、他を救済することによって完成する自利利他円満の世界、無住処涅槃（智慧あるが故に生死に住せず、慈悲あるが故に涅槃に住せず）のことである。ここに「証卷」において、往相の証果を明かす一段のあとに、還相の悲用が説かれる必然的理由がある。更に言えば、往相の証果が還相の悲用へと展開すると言うより、往相の証果の内容そのものが還相の悲用だと言った方がよいであろう。つまり、浄土に往生して仏に成ると言うことは、万人を救うことのできる身になるということなのである。そして、真実の証（無上涅槃）に必ず至らしめることを誓っている第十一願「必至滅度の願」を標榜として挙げ、更に、還相の悲用を明かす一段において、無上涅槃の内実とも言える還相のはたらきを誓っている第二十二願「還相回向の願」を挙げていることから、真実の証は、阿弥陀仏の本願力によって与えられるものであることが明らかとなる。

つまり、真実の証とは、還相の悲用を内容とする無上涅槃のことであり、それは、自らの力で体得するものではなく、阿弥陀仏の本願力によって与えられた優れた境地なのである。

註

(註1) 正定聚とは、必ず仏に成ることが決定しているなかま(成仏決定) という意味であるが、他力念仏による往生は、往生即成仏であるので、親鸞は、正定聚を、必ず浄土に往生することが決定しているなかま(往生決定) という意味で使われることもある。『一念多念証文』(『原典版聖典』七八一頁) では、『大経』第十一願成就文を解釈するところで、「正定の聚に住す」の左訓に「かならず仏になるべき身となれるとなり」(成仏決定) とあり、同じく『一念多念証文』(『原典版聖典』七八〇頁) では、即得往生を解釈するところで、「正定聚」の左訓に「往生すべき身とさだまるなり」(往生決定) とある。

(註2) 「信巻」「現生十益」に、「金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲。なにものか十とする。(中略) 十には正定聚に入る益なり。」(『註釈版聖典』二五一頁) とある。

(註3) 他力回向の行信を以て証入する真実証なるが故にこそ、利他円満之妙位と誇示されるのである、と一往の決定をしたその上の再往の義として、その妙果が究竟の極証なるが故に、必然的当為として二利双意である旨を示す為に、還相の釈義が、これと更に、この『証巻』で強調されてある事実根拠として、この利他を、往生人の果後の化他(還相摂化の悲用)を顕はす釈義、と拝窺する事は必ずしも不当であるとは云えぬ。(加藤仏眼『教行信証堅徹』一九八頁)

(註4) 梯實圓氏は、親鸞が往生することが成仏することである(往生即成仏)と言われた理由として、真実報土は無上涅槃であり大涅槃の境界であって、阿弥陀仏の悟りの領域であると言われていたことの他に、正定聚を現生の益とみなし、しかもそれを弥勒菩薩と同じ一生補処の位であると言われたことを挙げている。

正定聚を現生の利益とみられていたことは、「証巻」に

「しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。」

とあることより明らかである。煩惱具足の凡夫が、往相回向の心行（信行）を獲れば、即座に大乘正定聚の位に住せしめられ、必ず滅度の悟りを得ることができるのである。更に親鸞は、この正定聚を弥陀と同じ等覺の位、一生補処の位であるとす。『正像末和讃』に、

「真實信心するゆゑに すなはち定聚にいりぬれば

補処の弥陀におなじくて 無上覺をさとるなり」（『註釈版聖典』六〇五頁）

と言われている。補処とは、仏陀の座処を補うということで、仏陀になることである。つまり、一生補処とは、今の一生が終ると、次の生において仏陀の位につくことが定まっている位ということであり、弥陀菩薩がその典型である。そして、念仏の衆生は「すなわち弥陀と同じ（便同弥陀）」であると言われるのであった。「信巻」に、

「まことに知んぬ、弥陀大士は等覺の金剛心を窮むるがゆゑに、竜華三会の曉、まさに無上覺位を極むべし。念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるがゆゑに、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。ゆゑに便同といふなり。」（『註釈版聖典』二六四頁）とある。念仏の衆生は、如来より信心を与えられ、その信心は如来の智慧と慈悲をその体としてるので、臨終一念の夕べ、大般涅槃を得るのである。これが往生即成仏を語るもう一つの理由である。（梯實圓『教行信証の宗教構造』三六八―三七一頁参照）

（註5） 普賢晃寿『顕浄土真実証文類講讀』四四―四五頁参照

（註6） 「利他」の言は、往生人の果（自利）後の利他化他を意味すること、を以てその当分とするが、その本源が勿論、如来の妙願力にあるが故をもつて帰本すれば亦、本願力・他力、の「利他」であるべきは、理の必然である。（加藤弘眼『教行信証 堅徹』二二二頁）

（註7） 読み方は、梯實圓『教行信証の宗教構造』三八四―三八七頁参照

〈キーワード〉

教行信証

証巻

必至滅度

往生即成仏

還相回向